

患者さんの人生を  
『まるごと治療』にしないために

緩和ケア内科  
部長  
合田 由紀子



患者さんや家族に対して、体の痛みや辛いお気持ちを少しでも和らげるようにお手伝いするのが、私たち緩和ケア内科です。

がんを患う患者さんの中には、病から来る症状のほか、治療の辛さに苦しまれる方が多くいます。私たちは、できるだけ治療の早期の段階から、患者さんの診療に参加したいと思っています。

患者さんの人生を『まるごと治療』にしない—緩和ケアは毎日の生活の質(QOL)を高める医療です。

緩和ケアの基本はチーム医療です

当院には緩和ケアチームがあります。入院患者さんの診療にあたっては、緩和ケア医の診療・薬剤師による薬剤調整に加え、多くの関連スタッフが治療に参加しています。

例えば、精神科医は年間約130名のがん入院患者さんに介入し、放射線治療科は年間約100名の緩和的放射線照射を行い、リハビリテーション科は年間約40名のがん緩和リハビリテーションを行っています。歯科口腔外科による口腔ケア、栄養科によるNST介入は『食』を通じて患者さんの生きがいを支えています。

緩和ケアチームは、これら治療スタッフと、ホスピス転院・在宅医療調整に取り組む地域連携センター看護相談係、入院生活にアクセントをもたらすボランティア『やさしさジェントル』が参加しています。毎週、カンサーボードの一つである緩和ケアカンファレンスを開き、患者さんの治療方針について多角的な検討を行っています。

緩和ケアカンファレンス



パンフレット

右「オピオイドをはじめの方へ」

左「市立札幌病院 がん疼痛緩和ポケットマニュアル」



がん患者さんの疼痛コントロールを浸透させます

がん患者さんの疼痛緩和には、多くの場合、通常の鎮痛薬に加えてオピオイド(医療用麻薬)を必要としますが、大半の患者さんはオピオイドの開始にあたって強い不安を覚えます。緩和ケア内科では薬剤部と共同でオピオイドに関するパンフレットを作製し、患者さんがオピオイドの安全性、副作用等について正しく理解できるように努めています。

また医療者側にもオピオイドの使用経験の少ないスタッフがいます。私たちはWHO方式に準拠した疼痛コントロールについてコンサルティングを行い、患者さんの疼痛緩和を図っています。

がん疼痛の多くは、鎮痛薬の適正な使用でコントロール可能です。患者さんの痛みがある限り、緩和ケアチームは、病棟をくまなく駆けずり回ります。



左より：松山茂子緩和ケア認定看護師・上村恵一精神科医師  
合田医師・小田浩之後期研修医

緩和ケア内科の診療は、入院・通院患者さんに対して、主治医からの依頼に基づき行います。昨年度は約160名の患者さんの紹介を受け、入院患者さんに対する年間回診数は延べ5,000人・日に上りました。また、通院患者さんに対しては、週3回(月、水、木曜日各午前中)の外来診療を行っています。

地域医療機関の患者さんの疼痛コントロールについてご相談がある場合には、お気軽にご連絡ください。また、当院からの転院・在宅医療移行にあたっては、格別のご高配を賜いますよう、末尾ながらお願い申し上げます。